関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

近世初期俳諧における「やさし」の用法－『江戸八百韻』に見える「婀娜」「艶し」について

著者	田中 巳榮子
雑誌名	國文學
巻	95
ページ	71-82
発行年	2015-02-10
URL	http://hdl.handle.net/10112/9309

近世初期俳諧における「やさし」の用法

――『江戸八百韻』に見える「婀娜（ヤサシ）」「艶（ヤサ）し」について――

田中巳榮子

はじめに

近世初期俳諧の表記に関しては、ほとんど研究が進んでいないと思われることから、これまでに近世初期俳諧集九種[1]を取り上げ、漢字と振り仮名の関係など、書かれたものに認められる諸現象の検討を重ねてきた。

その一連の研究において、本稿では、『江戸八百韻』の集中

相宿り天狗も婀娜（ヤサシ）郭公　青雲　（二〇一）

半分見えし姿艶（ヤサ）しき　来雪　（四四）

と詠まれる句の中に、「ヤサシ」に対して「婀娜[2]」「艶しき」の二通りの漢字表記[3]が見えることに着目して、考察を試みていきたい。両者は九俳諧集中『江戸八百韻』にのみ見える漢字表記語であり、「ヤサシ」に対して常用されていたとは考えられないこと、また「ヤサシ」に対して、この二種の漢字を用いることは、そこに何らかの表現意図を伝えようとしているのではないかと考えられるからである。

資料には天理図書館綿屋文庫蔵本の『江戸八百韻』（天理図書館綿屋文庫俳書集成　第六巻『談林俳諧集一』所収）を使用した。同書の解説によると、『江戸八百韻』は延宝六年（一六七八）刊の幽山・安昌・来雪・青雲・言水・如流・一鉄・泰徳等八名が興行した百韻八巻を収めるものであり、幽山等著、幽山・言水共編、寺田重徳刊の作品集である。

参照する『節用集』には、黒本本・明応五年本・伊京集・天正十八年本・饅頭屋本・易林本・合類節用集・書言字考節用集の八種と、適宜その他の古辞書をも使用する。

また、本文中の傍線は稿者が付記したものである。

一　「婀娜」について

本節では、当該集において、

ア、相宿り天狗も婀娜郭公　　青雲（二〇一）

　　鬼心せよ五月雨の闇　　来雪（二〇二）

と「婀娜」を「ヤサシ」と読むことについて言及していくことにする。

まず古辞書類で「婀娜」を見ると、

『易林本節用集』―「ヤサシ・ナマメク・アダ・アナ」

『合類節用集』『書言字考節用集』―「ナマメイテ（ナマメク）・タヲヤカ」

と訓が付され、『色葉字類抄』では「たをやか」と読む。また『倭玉篇』（慶長十五年版）には「婀　タヲヤカ」「娜　ナマメク／タヲヤカ／シナヤグ」の和訓が記される。それならば、実際にどのような場面に使用されているか、その実態を提示してみたい。

『遊仙窟』（江戸初期版刊記本）に

「婀―娜腰―支」―左傍訓「タヲヤカナルコシハセ」

「婀―娜（トタワヤカニ）　蒭―茸（トモクサカリ）」―「娜」の左傍訓「トナマメキ」

「茸」の左傍訓「トサカリニシテ」

「華―容（カホ）婀―娜」―「容（カホ）婀娜」の左傍訓「カタチタヲヤカニシテ」

「婀―娜（トニ）徐―行（ク）」―「婀娜」の左傍訓「ナマメイテ」

とある。『玉造小野小町壮衰書』には、『遊仙窟』と同じ「婀（タ）―娜（タト）腰―支（ノ）」が見え、

　婀（タ）―娜（タト）腰―支（ノ）誤楊―柳ノ之乱（カト）春―風ニ

と「婀娜」の左傍には「タヲヤカナル」、「腰支」の左傍には「コシハセ」と訓を付し「アタトタヲヤカナルヨウシノコシハセハ」と文選読みをする。この『玉造小野小町壮衰書』を典拠として、謡曲「卒都婆小町」に「ひすいのかんざしはあだとたをやかにしてやうりうのかぜになびくがごとし」[4]という一文があり、さらに、「卒都婆小町」を典拠とする作品には、俳論書『評判之返答』や仮名草子『恨の介』がある。これらの文選読みの文例における和訓は「ナマメク」或は「タヲヤカ」と記され、何れも「ヤサシ」ではない。『鶉衣』（寿光先生伝）には「げに先生や婀娜たる美少年なりし」とあり、これもヨミは「あだ」であって「ヤサシ」ではない。以上の用例で取り上げた「婀娜」は、美しい人を形容する語として使用されている。西鶴の浮世草子では、「やさし」と振り仮名が付される例が見えるので、列挙してみたい。

◇『男色大鑑』には

①わつかのうちも恋路はやるせなきに此事しらせてよと仰せけるは婀娜御心入と水櫛捨て立出　（巻一・四）

②されども戀よりの悪事なれば此上ながら御前世間をつつむと咄せば婀娜心入感じて自然と沙汰して若道の随一と申も愚なり　（巻一・五）

③年長たる女房の姿婀娜しかも面子の忸怩なるが鍋ひとつかざして是をさへ恥るも有に　＊「怪」はママ　（巻三・一）

④ひだり手に山吹の婀娜花をかざして静に豊なるを人間とは思はれず　（巻三・五）

⑤思はずも潸然しに戀君も心にかゝり初しや千嬌ある御顔ばせにて婀娜も見かへし給へり　（巻三・五）

とあり、「婀娜」は①②では「優しいお心遣い」と心づかいの細やかさ、③ではしなやかで美しい姿、④⑤では仕種の優美さを描写する場面に「婀娜」が用いられる。

◇『好色一代女』（巻三・一）では

⑥形を生移しなる女人形取出されけるにいづれの工か作りなせる姿の婀娜も面影美花を欺き見しうちに女さへ是に奪れけるとあり、この場面では「婀娜」は姿の美しさを表し、『男色大鑑』③と同じ用法である。以上の用例から、顔かたちの美しさに対しては、③では「面子の忸怩なる」、⑤では「千嬌ある」、⑥では「美花を欺き」と「婀娜」では表現されず、別の言葉を用いる。このように①から⑥までの「婀娜」は、姿や態度の優美さ、或は対人態度や内面的な美の表現に用いられ、顔かたちの美しさには用いられない。

当該集アの句は「天狗がやさしい」ということが、この句のポイントであり、郭公が天狗と相宿りして、恐ろしい形相の天狗も相宿りしてみればやさしいと、想像と実際のギャップの面白さを詠む。その意外性を表現するのが「婀娜」の漢字である。

二　「艶しき」について

前節の「婀娜」に続いて、もう一つの用字「艶」を「ヤサ（し）」と読むことについて考察していきたい。

イ、都也と有所の竹格子　安昌　（四三）

半分見えし姿艶しき　来雪　（四四）

と詠まれ、「艶し」は、類聚名義抄・温故知新書・運歩色葉集・文明本節用集・伊京集・黒本本節用集・易林本節用集・書言字考節用集・和漢通用集・俳字節用集などに収録がある。「ヤサシ」以外の「艶」に対するヨミでは

『類聚名義抄』―「ウルハシ・ナマメイタリ・ナヨ、カナリ」
『易林本節用集』『書言字考節用集』―「ウルハシ」
『倭玉篇』（慶長十五年版）―「ウルワシ・カヲヨシ・ハナヤカナリ・ミヤビヤカ」

などの訓が付される。『倭玉篇』（慶長十五年版）での「やさし」に対応する漢字は「嫋」であり、下に付された和訓は「ナマメイタリ・ヤスシ・アハス・ヤサシ」と記される。『倭玉篇夢梅本』では「ヤサシ」に「吝」、『篇目次第』では「姿」とあり、節用集では、漢字「婀娜」「艶」以外には「優・有情・優美・迷美・幽美・詭・嬌・尋常」などの収録がある。

「艶」を「ヤサシ」と読む用例を前掲の「婀娜」と同様に、西鶴の浮世草子から取り上げてみると

◇『好色一代男』

⑦顔うるはしく生れつき艶しきをちいさき時より是に仕入てとりなり男のごとし　（巻四・五）

◇『武道伝来記』

⑧尋常俤の艶きに付てもありし世を思ひくらべて母のなげき大かたならず　（巻六・四）

と姿・容貌が美しい女性を描く場面に用例が見える。

◇『本朝二十不孝』

⑨みづから賤しき形ながらそれそれの勤もあれば傾城屋に身を売事はといふにそ心ざし艶しく　（巻一・二）

⑩人の心のおそろしきに艶しき狼を恐れる　（巻四・二）

⑪此里艶くも是をいたはり色々此子の人なる事を申ぬ　（巻四・三）

⑫掛乞宵よりの事とも段々見て袖をしたしかかる艶しき女の有べきか　（巻五・一）

とあり、⑨から⑫では、「婀娜」の用例①②と同じく心づかいの細やかさが描かれている。

西鶴の作品中、『男色大鑑』『好色一代女』では「やさし」の表記に「婀娜」を使い、『本朝二十不孝』『好色一代男』『武道伝来記』では「艶」を用いるというように、同じ作者でありながら、作品による用字差が見え、「やさし」の表記に、同じ作品中では「婀娜」と「艶」を混用することはない。この事象は、杉本つとむ氏が『西鶴語彙管見』で述べているように、一つには、西鶴自身が意図的に使い分けていると考えられるが、それ以外に、作品による板下の筆者の違いなど、出版事情の関係も考える必要があるだろう。

一二〇〇年初めの歌論書では、『無名抄』に「艶にやさしく」

「えんにやさしく」とあり、『後鳥羽院御口伝』には「やさしく艶なるあり」「やさしく艶に」「艶にやさしきを」など「艶」は「やさし」とともに使われる。『角川古語大辞典』の「やさし」の項には、「特に中世和歌文学の世界において、艶（えん）や優（うい）同類の美的価値」とあり、歌論用語から「艶」に「やさし」の訓が施されるようになったと推察できる。

◇近世の俳文学作品での用例

⑬田地塞き吾妻も艶し花続　　調管子

『誹諧坂東太郎』（九三）

と「艶し」が見え、校注者は「艶し」に「なまめか（し）」と振り仮名を付すが、「なまめかし」では字余りである。ここは「やさし」と読むのが順当だろう。また

⑭衣賦り艶しや遠きいとこ迠　　ひさ女

『俳諧雛波曲』

⑮艶しさや後朝梅のおぼろ〳〵　　素龍

『蕉門名家句集』

などに「艶し」が見え、この二句には校注者は「やさ（し）」と振り仮名を付す。⑬の花続は大唐米に似ていることから、田と花続は縁語であり、吾妻には吾妻琴と妻が掛けられ、貧しいながらも、狭い田地に花続が咲き乱れ、妻が奏でる吾妻琴のやさしい音が聞えてくると情趣ある光景を詠む。⑭ではいとこにまで衣服を与える心配りのやさしさを詠み、⑮では別れの朝の美しい姿に、梅がぼんやりかすんで見えると詠む。

⑯此句行脚轍士ニ対スル送別ノ吟ナリ。コレニ轍士ハ

ひかれぬ足に濁す夏川

ト脇ヲ附シ「白雪か子十二歳の即興也。余に艶しく覚て脇に及びし」ト添書セリ

（『蕉門名家句集』桃後の句「卯の花をうちつけながら泪かな」の左の詞書）

⑰匂ひの花といふ事、故実あり。…（略）…牡丹花指上げられし時、何にても御褒美有べしと勅し給ふ故、此花の事申されしに、艶しく思召て勅免を蒙りしより、匂ひの花といふ也…

『蕉門昔語』

⑯⑰の二例は情趣ある様子を「艶し」で表現し、底本には振り仮名が付されていないが「やさし」と読むと想定できる。

以上のような検討の結果、「婀娜」は『遊仙窟』では、美しい姿・容貌を表現する語として用いられる。

それに比して、当該集や西鶴の浮世草子の「婀娜」は、心のやさしさや姿の美しさを表現し、「艶」は心のやさしさ、姿の美しさ以外に、『倭玉篇』の訓には「カヲヨシ」ともあり、⑧の用

例のように「俤」をやさしと表現するのに用いられる。また⑯⑰では和歌文学に通じる情趣などを表し、「婀娜」との相違点が窺える。

イの句の「艶しき」は、竹格子の間から半分見えた姿が、なまめかしく美しいと表現するための文字遣いである。俳諧では一句の少ない文字数の中で、どの漢字で表現すれば句の雰囲気を出せるかが重要なのである。

三　「やさし」に対応する他の漢字の用法

前節で述べたように、節用集には「やさし」に対して、「婀娜・艶」以外に「優・有情・優美・迷美・幽美・詛・嬌・尋常」などの収録がある。本節では、これらの用字が近世初期の俳諧で、「やさし」として使われているか、考察を加えていきたい。調査には『古典俳文学大系CD-ROM』（集英社）を使用した。

・優―優（イウ）な姫をうへ人達や恋の歌　『正章千句』（二五）

公卿は優にそだちたまへり　『正章千句』（九五四）

優なるはけふの御賀の座敷にて　『玉海集』（三七四三）

へしおるといふも花には優ならず　『俳諧塵塚』（四七九）

など、形容動詞として音読み「ゆう（いふ・いう）」で用いられる。

・優美―上手ほど名も優美也すまひ取　『蕉門名家句集』其角（五九七）

見わたせばいと優美なりけりや春　『誹諧句選』（一三三）

など芭蕉以降の俳諧に見えるが、「優」と同じく形容動詞であり、音読みである。

・有情―有情かとみれば蛍はひ情かな　『崑山集』（三三二五）

と、「ひ情」の対語として用いられ、中興の俳諧集にも「有情」が出現するが、「ヤサシ」のヨミではない。

「尋常」は、『継尾集』には「皇后　尋常御肌にいだかせ給ふ千満の二珠によそへ」とあるが、「じんじょう」或は「よのつね」と読むか、それとも「やさしく」と読むかは明らかではない。「幽美」は、『源氏鬢鏡』の序文に「言葉幽美にして」とあり、音読みであると判断できる。「迷美・嬌」の例は見られず、「詛」は、次のように「やさし」と読む例が見える。

⑱わやく者も髪置といへば詛く成ぬ　『洛陽集』（一〇二一）

とあり、腕白者も髪置の儀式を行う年齢になると、おとなしくなると詠み、たしなみが備わる様子を「詛く」と表現する。

これらの漢字以外に、節用集では「やさし」として収録され

ていないが、『滑稽太平記』（巻三　新光寺の事）に次のような例がある。

⑲近比、和歌の道甘身き物を、下劣に云下す事、沙門の身にて尾籠千万ならずやと、世人評しけり。

右の「甘身き」の注[6]には、乾裕幸氏の「ヤサシ」のヨミとした経緯が記されている。「和歌の道」との関連からも、ヨミは「ヤサシ」であると認めることができる。

もう一つには、時代が下るが蕪村の発句集の句（明和八年以前）に「しぐるゝや胡のわたる琴の上」の詞書に「賀越の際、婦人の俳諧に名あるもの多し。姿嫩く情の痴なるは女の句なれば也。」とあり、校注者は「嫩く」に「やさし（く）」と振り仮名を付す。しかしながら、「蓑虫説」（文章編　短編類四　明和八年）に同じ文の掲載があり、「姿嫩く」が「姿弱く」と「嫩」が「弱」に書き換えられている。一七二三年刊の『海音集』（『海下一～四九』）には「嫩い思案はむらさきて書　青輔」とあり、「嫩い」に「ワカ（い）」と振り仮名が付されているのが見える。また「嫩」は辞書類においては、『倭玉篇』（慶長十五年版）・『節用集』（易林本・天正十八年本・明応五年本・黒本本・合類・書言字考）で「ワカシ」とあり、『合類節用集』『書言字考節用集』の「嫩」の下には〈弱也／少也〉と注記がある。これらのことから「嫩く」は「わか（く）」と読むと推測する。

以上本節では、「婀娜・艶」以外の「やさし」を表す漢字について考察を重ねてきた。「やさしき」に「優」が与えられないことに関しては、疑問が残るが、機会があれば考えてみたい。『古典俳文学大系CD-ROM』で、「やさし」の表記を一覧してみると、仮名書きが句のみでは約一一三例、漢字表記が一例（句以外の⑲は除く）、この内、近世初期の『貞門俳諧集（一）（二）』『談林俳諧集（一）（二）』だけを見ると、句のみの仮名表記が二六例に対して漢字表記は⑱の一例である。『古典俳文学大系』に所収されていない『江戸八百韻』を含めても、漢字表記は三例しかない。西鶴の前掲の五作品中では仮名表記が三九例、漢字表記が一二例と、何れも仮名表記が圧倒的に多い。

四　仮名書き「やさし」の用法

当該集では前掲のア・イの句以外には、用語「やさし」は、漢字の異表記や仮名表記でも出現する事がない。他の俳諧集での仮名書き「やさし」の用例では

⑳花ずきをするかやさしき心ばせ　『正章千句』（一〇九九）

㉑農人もするかやさしき方違へ　可頼　『紅梅千句』（八九七）

㉒糸ゆふといへばやさしき歌の道　『貞徳誹諧記』（巻之上）
㉓やさしくも草花売て帰るらん　『新増犬筑波集』（秋）

などがある。⑳の「やさしき」は、情趣を解するやさしい心を表現する。㉑の句は、前句に節分が詠まれ、飯田正一氏（『貞徳紅梅千句』桜楓社）は、「節分には、農民もするのだろうか、床しい方違えの習慣を」と解釈を施し、優雅な様相を「やさし」で表現したと捉える。㉒では幽玄・優美のような美の理念の表現に用い、㉓では控えめな様子を「やさし」で表している。近世初期の句のみの仮名表記二六例中、花鳥月と共に詠まれるのが八例、心と併用されるのが三例、和歌をやさしと詠む例が二例あり、人の姿のたおやかさ・あでやかさをやさしと表現する例は見出し得ない。

上述の「婀娜」と「艶し」の用例を引用した西鶴の浮世草子五作品において、「やさし」に対応する他の表記について調査してみると、漢字での異表記は出現せず、平仮名で表記される。そこで、「婀娜・艶し」と仮名書き「やさし」の表現する場面では、語としての使い分けがあるのか、五作品での「やさし」を文脈上の意味を通して考えてみる事にする。

「婀娜」を使用する『男色大鑑』では、「やさし」と仮名表記されるのが一七例見え、『好色一代女』では六例見える。「艶」を使用する『本朝二十不孝』では二例、『好色一代男』では八例、『武道伝来記』では六例出現する。それらには次のような場面が表出されている。

1、心づかいのこまやかさ・対人態度において思いやりのある様を表す。（一五例）
2、美しい姿（優美、なまめかしさ、色っぽさを含む）を表す。（一三例）
3、風雅な趣がある様・言語や動作が優美である様を表す。（八例）
4、しおらしい情景を表す。（二例）
5、雨が降る情景（弱い様）を描写する。（一例）

右の五つの分類の中で、1に該当する「やさしき心ざしふかし」（『男色大鑑』巻五・一）などは、漢字の用例①②の「婀娜（やさしさ）心入」と同様に心づかいの細やかさを表現するが、必ずしも漢字「婀娜」で表記されるわけではない。

4「しおらしい」に属する「薄縁敷きし奥の間に、やさしくも屏風引廻してありける」（『好色一代男』巻三の五）や「人の目をしのぶこころもやさし」（『好色一代男』巻三の六）の、控えめでしおらしい情景を描く場面、また、5の「雨が降る情景」に属する「雨はやさしく風はあらけなく」（『男色大鑑』巻三の

一）のように、雨の降る様が「さほどではない」と表現する場面では、「婀娜」「艶」は情景描写に適さないだろう。

以上が「婀娜」及び「艶し」の用語が見える作品での、仮名書き「やさし」の出現状況である。このように見てくると、仮名書き「やさし」は、漢字「婀娜・艶」では表現できない幅広い場面に登場する。漢字で表記された場面では、漢字本来が持つ意義と、振り仮名「ヤサシ」を合わせて、同じ美しさの中でも、なまめかしさ・しなやかさなど、視覚的にその用語の環境を想定する事が出来る。前掲の『西鶴語彙管見』によると、『好色一代女』の「冒頭の構想は『遊仙窟』によるといわれる」（一六〇頁）とあり、『好色一代女』（巻一の一）や『男色大鑑』では「婀娜」以外にも、「調謔（たはれ）・面子（かほばせ）・靚粧（よそひ）・透迤（なよやか）」などが見え、『遊仙窟』に範を仰いでいる事が認められる。杉本つとむ氏は、また同書で

西鶴の場合は愛読書というか、ある特定のものによったらしいことは推測される。しかしまた（婀娜）も上掲の辞書では（ナマメク・ヤサシ）であり、慶安版の『遊仙窟』ではタヲヤカであって、むしろ西鶴が特定のものに求めたというよりも、当時の用字として文章語（中国小説など、この種漢文訓読的なもの）から取り出したものであろう。（一六〇頁）

と述べ、続いて「『節用集』などに見られる点から、日常的な語彙と考えるのはむしろ本末転倒である。『節用集』の語彙の性格は今後究明さるべきである」（一六一頁）と説明が加えられている。節用集に関しては、安田章氏が『中世辞書論考』[7]の中で、「節用集は和漢聯句のための用語辞典であると臆断する」、または「室町時代に成立の辞書は概ね韻事を目指したものであった」と述べられていることに注意したい。

当該集で「婀娜」に「やさし」の訓が与えられるのは、西鶴の作品よりも早く、俳文学作品で「艶」を「やさし」と読むのも、当該集より後に用例が見え、当時の新しい表現として両者を取り入れていることは、俳諧における用字の観点から注目すべきだろう。

おわりに

当該集には、一つの和語に対して複数の漢字表記がある語に三一語があり、俳諧の表記の多様さを示していることに視点をおいて、「婀娜（ヤサシ）」「艶（ヤサ）しき」について検討してきた。その結果次のようなことが明らかになった。

一、西鶴の浮世草子では、「婀娜」「艶し」の用字は、作品による両者の使い分けが看取でき、「婀娜」には「艶」のように、顔の美しさや和歌の美を表現する場面には例が見えない。

二、『江戸八百韻』の「婀娜」は、「天狗」と対立的な語「婀娜」を取り合わせる事により、意外にもたおやかであると句の面白さを効果的に表現する。「艶」は竹格子の間から見えた美しい女性の姿を表現し、両者は表現性を重視した漢字の用法である。

三、「婀娜」を「ヤサシ」と読むのは、現段階では、『易林本節用集』と西鶴の浮世草子以外では用例を見出すことが出来ず、また「艶し」も「やさし」に対して頻出する漢字ではない。これらは当時の「やさし」の和訓に対して、一般的に常用されていたとは考えられない。

四、俳諧及び西鶴の浮世草子での「やさし」の表記には、漢字よりも仮名で表記される方が多い。

五、「婀娜」「艶し」は、節用集に「やさし」に対応する漢字として収録があることから、幽山等の文字意識は、節用集の教養の世界と共通していると云える。

俳諧に新鮮味のある用字で書き表そうとする傾向があることについては、拙稿[8]（二〇一〇）で、『七百五十韻』において、既出の用例よりも早い「時計」を初めとして、辞書にも収録がなく、且つ用例も見出せない漢字表記語がいくつかあることについて触れた事がある。「婀娜」を「ヤサシ」と読むことも、現段階では『江戸八百韻』より早い例は探し出す事ができず、著者高野幽山等の創意工夫を凝らした漢字の用法が窺える。

〔注〕

（1）『正章千句』『紅梅千句』『宗因七百韻』『當流籠抜』『江戸蛇の鮓』『江戸宮笥』『軒端の独活』『七百五十韻』（近世文学資料類従　古俳諧編28・33・34・35・36・39　勉誠社　昭和五〇年から五二年）『江戸八百韻』（『談林俳諧集一』天理図書館綿屋文庫俳書集成第六巻　平成七年　八木書店）

（2）「姸（ヤサシ）娜」の「姸」は『大漢和辞典』に、「或は婀に作る」と記されているので、本稿では「婀」を用いる。

（3）『江戸八百韻』には同じ語に対して複数表記される語が次のように三一語ある。

（〇の中の数字は二回以上の出現回数を示す）

・一方は漢字二字での表記、一方は漢字二字のうち一字を仮

名表記する複数表記　（異なり語数一一）

朝かすみ／朝霞　大かた／大方　こと葉／言の葉

住よし／住吉　立わかれ／立別れ　取たて②／取立　野へ③／野邊　松むし／松虫　夕ぐれ／夕暮⑤　ゆく衛／行衛②　よし野／吉野

• 使用漢字が異なる複数表記　（異なり語数　二〇）

明ほの②／曙②　うき世／浮世／憂世　大觴／大盃

面影／俤　親仁・親仁／親父　兒／顔　着更衣／衣更着②　駕／駕篭　皮／革　苺／莓　前／先⑥　既に／已に　蔦／蘿②　啼　④／鳴たる②　乗物／駕　一人／独　郭公②／時鳥　村艶／村紅葉　婀娜／艶しき　棣棠／山茨

（4）日本古典文学大系（『謡曲集上』昭和三五年　岩波書店）所収の「卒都婆小町」の頭注には、

壮衰書に「婀娜腰支誤楊柳之乱　春風」とある腰つきの形容を、髪の形容に転用した。

とある。

（5）『西鶴語彙管見』（杉本つとむ著　昭和五七年　ひたく書房）には、次のように述べられている。

一つのコトバがいろいろに表記されていることである。たとえば、ササヤクはつぎのように見られる。（略）これに、かな表記を加えれば十一種類となる。これは一人の使い分けか。このうち真性の西鶴のそれはどれなのか。（略）一個人の幅として、十種はユレがありすぎる。だからこそ板下も数人というか、いろいろの人物を仮定することになるのである。（略）板下の複数、さらには西鶴作か否かの作品論へも発展するのではないかと思っている。（一九四頁から一九五頁）

（6）「吉田肥前カラ〳〵ト笑テ、哀甘身ヤ、敵ノ種ヲバ此ニテ尽サスベシ」とあり、『太平記鈔音義』『和漢合類節用集』『反故集』等に、アサマシと付訓する。しかし、本書に出る用例はすべて意味上ヤサシと訓むべきであり、なかんずく巻七「高島及加撰集の事」の「老後の思ひ出、是に過じ、御免あれと望しかば、あゝら甘身やとて、皆感涙をぞ流しける」が、謡曲「実盛」「あらやさしやとて皆感涙をぞ流しける……老後の思出これに過ぎじ御免あれと望みしかば」を踏むものであることからも、ヤサシに決定すべきである。なお本書の作者は、アサマシには浅間しの漢字を当てている（巻四「雛屋立圃手柄の事」等）。『滑稽太平記』（注　六五五頁）

（7）『中世辞書論考』安田章著　昭和五八年　清文堂（五から

六頁参照）

（8）「『宗因七百韻』と『七百五十韻』の表記――振り仮名の機能と表記形態の特徴――」関西大学国文学会『国文学』二〇一〇年二月掲載

引用文献

*『鶉衣』『玉海集』『源氏鬢鏡』『滑稽太平記』『崑山集』『蕉門昔語』『蕉門名家句集』『新増犬筑波集』『継尾集』『貞徳誹諧記』『誹諧句選』『誹諧坂東太郎』『俳諧塵塚』『俳諧難波曲』『評判之返答』『蕪村発句集』『洛陽集』（古典俳文学大系　昭和四五～四七年　集英社）

*『恨の介』（日本古典文学大系『仮名草子集』昭和五〇年九刷　岩波書店）

*『海音集』方設編　享保八年刊（『池西言水の研究』宇城由文著　二〇〇三年　和泉書院）

*『後鳥羽院口伝』（『歌論歌学集成』第七巻　平成一八年　三弥井書店）

*『好色一代女』『好色一代男』『男色大鑑』『武道伝来記』『本朝二十不孝』（『新編西鶴全集』第一巻・第二巻本文篇　平成一二年一四年　勉誠社）

*『玉造小町子壮衰書の研究』（松平文庫本）平成三年　臨川書店

*『貞徳紅梅千句』飯田正一　昭和五一年　桜楓社

*『無刊記本　無名抄』（和泉書院影印叢刊48　第三期　昭和六〇年　和泉書院）

*『慶安頃寺本遊仙窟総索引』（康永三年書写）平成七年　汲古書院

*『江戸初期無刊記本遊仙窟本文と索引』蔵中進編　昭和五四年　和泉書院

（たなか　みえこ／本学大学院生）